

## シンポジウムⅢ

## 21世紀型の学習空間を考える

小堀哲夫 (株式会社小堀哲夫建築設計事務所 代表)



学校の空間構成の始まりは、イギリスの思想家ジェレミー・ベンサムが、効率的に監視できるよう考えた円形の刑務所施設「パノプティコン」だと言われています。また、フランスの哲学者のミシェル・フーコーが『監獄の誕生 - 監視と処罰』の中で、パノプティコンを統制と管理環境の比喩として捉え、近代の学校にも適用されると述べています。近代の学校建築も、生徒が先生に見られていることを空間化し、絶対服従と権力の自動化をしていきます。

学校のビルディングタイプの教育空間が、人間を監視する学習環境として造られたものとする、昨今のアクティブラーニングセンターや21世紀の学習環境は自律型の教育空間と言えます。

自律型の教育空間には、自由に上下左右に移動でき、自分の居場所を三次元的に見つけることができる、多様で多孔質である三次元網目構造が必要です。そのために私は、教育モデルを空間モデルに置き換えることが大事だと考えています。それは、建築を二次元の図面から三次元の模型にした瞬間に、人々が多くの気づきを得ることができる感覚に近いと言えます。また、模型を動かし、視点を移動させることで、私たちは空間を四次元として認識していきます。多くの学びを得るには「上位次元空間への視点移動」が大切なのです。

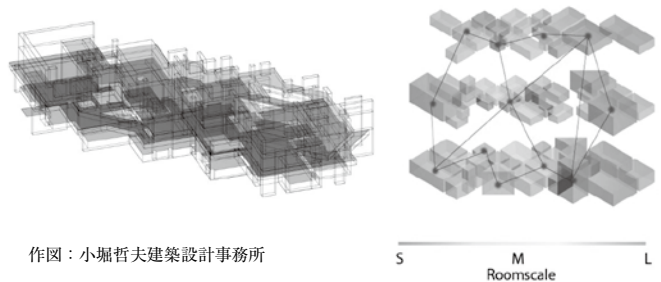
「ツリーではなくラティス」。建築家クリストファー・アレグザンダーは、自然に発生した都市はセミラティス構造を持ち、近代都市はツリー構造を持つと言いました。私は、近代都市の構造も、自然界の現象を次元を下げて再構成することで、伝達という目的を可能にすると考えています。セミラティス構造を三次元化していくことや、その三次元網目構造を移動する四次元化によって、より多くの気づきを得ることが可能になると思うのです。この三次元網目状構造は、多孔質な高分子ゲルです。身近な例で言えば、脳のニューロンネットワークや仮想空間であるインターネット空間や自然界の細胞と同じ構造です。

本居宣長は『古事記伝』において「日本は文字の文化

ではなく音の文化」であると発見しました。音とは環境であり四次元空間です。彼は、漢文体の古事記において、漢字の意味では理解できず、漢字の音（読み方）に本来の意味があり、語りや歌の文化であるということ、そしてこの「語りの文化（大和言葉）」と「言語の文化（当時の漢字）」では、意味の広がりや空間・時間の広がりや圧倒的に違うとして、解釈の再構築をしました。「文字」（漢字＝二次元）で読むのではなく、「音＝四次元」（大和言葉＝音）で感じるところに本質的な日本人の感性や精神構造が隠されていると。

彼は古事記冒頭の「天地」（てんち）という漢字を「あめつち」と音解釈するのに五年の歳月をかけています。物事を広く効率的に伝えるには「文字」（見える物理世界）が必要だが、物事を深く立体的に伝えるには「文字の音」（感覚に近い世界）であることを発見し、古事記の広く深い意味の体系、日本人の「もののあはれ」や「わびさび」に通じる概念、「自然への崇敬と謙虚の念」を再発見しました。今日の学習環境も、音や空気、光を取り込んだ四次元網目構造が必要であり、また環境そのものを学習環境として再構築することが求められているような気がしています。

自然環境も人間関係や情報環境も、すべて三次元にクロスした網目状の空間を持ち、時間と変化を伴った四次元網目構造です。私たちは学習環境を考える時、そのような自然環境や実社会の構造をヒントに設計を進めなければなりません。学習の一つの側面は自然環境や実社会のケーススタディであり、学びの創造性を高める学習空間は自然の構造そのものであるべきだと考えています。



作図：小堀哲夫建築設計事務所

## ◎プロフィール

株式会社小堀哲夫建築設計事務所代表、法政大学兼任講師・名古屋工業大学非常勤講師。法政大学工学研究科建設工学専攻修士課程修了。久米設計を経て2008年、小堀哲夫建築設計事務所設立。2017年、日本建築学会賞（作品）と日本建築家協会日本建築大賞を受賞。2018年、王立英国建築家協会のRIBA INTERNATIONAL Prize 2018's Longlis。2019年、2度目の日本建築家協会日本建築大賞を受賞。主な作品にROKI Global Innovation Center -ROGIC-、昭和学園高等学校、南相馬市消防・防災センター、NICCA INNOVATION CENTER、梅光学院大学。